

## 【表現学関連分野の研究動向】

## 文章・談話研究

星野 祐子

文章・談話研究として、2019年に書籍として刊行された研究の動向を確認する。

飛田良文・佐藤武義編『シリーズ〈日本語の語彙〉7 現代の語彙—男女平等の時代—』(朝倉書店)では、文学作品、アニメ作品、流行歌・Jポップ、LINEなどが分析対象とされ、メディア特性を反映させた語彙のふるまいが論じられる。例えば、画面全体でメッセージのやりとりが表示されるLINEでは、話題の連続性が担保され、だからこそ「感動詞のみ、あるいは単語や句レベルの短さで、あるいはスタンプのみ」の返信が可能であるとする。また、アニメ作品を対象にした研究では「役割語」の観点が導入され、アニメの言葉の全体像を把握する方法が提案される。例として『千と千尋の神隠し』が取り上げられ、「物語の構造と登場人物の台詞が強く関連し合っている」ことが指摘される。

次に、現実世界にみられる「配慮」という観点から、以下の2冊を挙げる。山岡政紀編『日本語配慮表現の原理と諸相』(くろしお出版)は、会話コーパスやwebページなどを資料に、引用表現、「全然」、「なんか」といった「配慮表現語彙」の機能を論じる。いずれの研究もポライトネス理論に基づくが、研究方法もデータもバラエティに富み、配慮表現研究の広がりや深まりが感じられる。なお、連絡ツールとして重用されるLINEは、ここでも分析対象となっている。分析観点は談話構造、コミュニケーション機能、機能的

要素であり、ロールプレイでなされた依頼トークの談話的特徴ならびに配慮的言語行動の実際が考察される。

続いて、庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美編『〈やさしい日本語〉と多文化共生』(ココ出版)を取り上げる。同書では、様々な立場にある人への配慮といえる「やさしい日本語」の実践が論じられる。文章・談話レベルの研究では、NEWS WEB EASY、市が発行するリーフレット・公文書などが資料とされ、「やさしい日本語」のあり方が、非言語表現も含めた様々な観点から分析されている。

会話での非言語行動に注目した論考としては、安井永子・杉浦秀行・高梨克也編『指さしと相互行為』(ひつじ書房)が興味深い。同書は会話分析の観点から日常会話や何らかの活動を含む会話場面を対象に、会話参加者の相互行為における「指さし」の機能を論じる。発話、プロソディ、指さし以外の身体動作、物理的環境なども分析対象にした多角的なアプローチが複雑な言語行動の姿を描写する。

最後に、近代語の具体的な姿をとらえた研究として、高崎みどり編『大正期『中央公論』『婦人公論』の外来語研究—論と広告にみるグローバリゼーション』(富山房インターナショナル)を取り上げた。文章研究に関する論考には、「システム」「ジレンマ」「テーマ」といった外来語のテキスト構成機能を指摘する研究がある。また、抽象度の高い外来語が用いられることでの文体上の効果が指摘される。

本領域は、日々変化する「日本語」の実際の姿をとらえる領域である。分析ツールやコーパスの整備によりその深まりを期待したい。(十文字学園女子大学)